

“マエストロ小林研一郎 80th 祝祭演奏会 VOL.2”

チャイコフスキー交響曲全曲チクルス

「昭和楽壇」の熱気を今に伝える最後のマエストロ、小林研一郎の傘寿 + 1

文：池田卓夫 音楽ジャーナリスト@いけたく本舗®

「炎のマエストロ」こと、小林研一郎（愛称コバケン）は1940年（昭和15年）4月9日生まれなので、昨年（2020年）傘寿（80歳）に達した。最も得意なチャイコフスキーの交響曲全曲を軸とした記念演奏会シリーズに、桂冠指揮者のポストを持つ日本フィルハーモニー交響楽団とともに臨むはずだったが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）世界拡大の影響で1年延期された。

世代的には秋山和慶（1941ー）とほぼ同じ、井上道義（1946ー）や尾高忠明（1947ー）のお兄さん格に当たるが、平成の30年間と令和の2年間で過ぎた今なお、昭和楽壇の「熱気」を色濃く放つ点で小林は独自の芸鏡にある。5最年長の小澤征爾がスクーターに日章旗を掲げヨーロッパへ武者修行に乗り込んだ実話が象徴するように、第二次世界大戦後の復興期は、日本の音楽家が世界へ雄飛した時代でもあった。作曲から指揮に転じ、東京藝術大学音楽学部を“2度、卒業、社会へ出るのが遅れた小林は下積みの時間も長かった。1974年にハンガリーの第1回ブダペスト国際指揮者コンクールに優勝、長いトンネルを抜け出した時はもう34歳になっていた。長い冬に耐えながら春を待ち、木々の芽生えとともに飛躍する東北人の精神を小林も受け継いでいる。

私はブダペストのコンクールの前年、世田谷区の中学3年生だった。渋谷公会堂で行われた音楽鑑賞教室を学校単位で鑑賞、小学生時代の同様授業のトラウマで「どうせまた、面白くない音楽を適当な演奏で聴かされるのだろう」と思っていたら、長髪の指揮者が舞台袖から走って現れ、えらく気合の入った「《エグモント》序曲」（ベートーヴェン）を“ぶちかまして、くれた。それが誰だったのか、長く記憶の底に沈んでいたのだが、何度目かの引っ越しの折、コンサートプログラムの束の中から「鑑賞のしおり」が出てきて、無名時代最後の年のコバケンだとわかった。

高校進学後、まず東京都交響楽団（都響）、続いてNHK交響楽団、日本フィルの定期会員になるとコバケンを聴く機会が格段に増えた。当時は今よりも幅広いレパートリーに挑み、よりインターナショナルな音づくりをしていた気がした。同時に、自身の強い意思で芸風を大きく変化させてきた、との思いも強くする。1つの分岐点は1982年6月28日、新宿文化センターで新星日本交響楽団（後に東京フィルと合併）を指揮した演奏会、まさにチャイコフスキーの「交響曲第5番」だった。「音楽の友」誌で絶賛し、ライブ盤の解説も引き受けたこれまた熱血の音楽評論家、故・宇野功芳氏は「最も雄弁な音のドラマ～赤い血潮が噴き出るようなチャイコフスキーの名演」と記した。私は余程コバケンと縁が深いのか、このLP盤を雑誌のプレゼントで当てた。いま聴き直しても、そこには「炎のコバケン」の原点の熱く、激しく、純粋な演奏が刻まれている。

以後のコバケンは次第にドイツ＝オーストリア圏、ラテン圏、スラヴ圏などヨーロッパ系の音楽語法の模倣、さらにインターナショナルに洗練された表現に背を向け、日本人の心に直接訴える主旋律の強調、演歌の“こぶし”を思わせるフレーズ縮小拡大のデフォルメを強めていく。大正から昭和にかけての教養主義がまだ色濃く残る当時、「コバケン節」はコアなクラシック音楽愛好家から忌み嫌われたが、より幅広い層のファンを開拓、バブル経済崩壊後の経営危機に直面した日本のオーケストラの経営を支え、音楽人口を増やす離れ業の原動力となった。その中心にはいつも、十八番の「チャイ5」（チャイコフスキーの「交響曲第5番」）が存在していたと思う。

誰の真似でもないコバケンのオリジナル、内面の炎に忠実な演奏スタイルは傘寿を経た今、1つの伝統芸や様式美の域に到達した。私もまた、4月13日のサントリーホールで「コバケンのチャイ5」と日本フィル、人生何度目かの邂逅に遭遇する瞬間を今から心待ちにしている。